

沖縄返還協定に調印

沖縄を米国の統治から日本の施政下に復帰させるための沖縄返還協定の調印式が6月17日、宇宙中継テレビを通じて東京とワシントンで同時に行なわれた。この結果、去る42年から5年越しの返還交渉も終結をみ、日米間の領土問題は一応解決したことになる。だが沖縄が永い間求め続けてきたものは単なる「戦後の終結」ではなかった。この祝福されるべき調印式に、真の主人公である屋良琉球主席は出席を拒んだ。そして現地沖縄では百万県民の悲願であった祖国復帰の達成を喜ぶ人々と、米軍基地の存続、特殊部隊やVOAがそのまま残る形式的「本土なみ」に不安を抱く人々と、賛成・反対と意見が割れた。差別と圧政を強いられて来た沖縄の歴史、百万県民だけでなく、世界中の人々が見守る中で行なわれた調印式、調印は沖縄の「復帰」に新たな問題を投げかけている。

あ る 真 実

— 狭山事件 —

埼玉県川越市。そこに小さな地方新聞社「週刊埼玉」がある。社長亀井兎夢さん(59歳)以下8人のスタッフが日に一度、2頁の新聞を出している。決して早くなくても良い、自分の足で調べ、大きな日刊新聞にない個性のある記事を書く。それが、この新聞のモットーだ。今この新聞は「狭山事件の再検討」と題する大特集を連載し、すでに17回を数える。

「狭山事件」——それは昭和38年5月埼玉県狭山で当時16歳の少女、中田善枝さんが暴行の上殺害されるという静かな農村におこった大事件であった。犯人として狭山に住む石川一雄が逮捕され、事件は落ち着いたかに見えた。しかし第二審冒頭、石川は犯行を否認するに至った。亀井さんは大新聞の報道に秘められた影の部分に疑いを持った。亀井さんは殺人現場に足繁く通った。ここで疑いは更に広がった。人目につくことが殆んどない雑木林で殺害しながらなぜ200メートルもむこうの穴へ死体を運んだのか。さらに石川の家族に会うと事件当日石川は家でテレビを見ていたという。亀井さんは調書も検討した。自白内容と現場調書との相違は自白が強要されたものでないか。それならなぜ警察は石川を犯人にしななければならなかったか——。

昭和38年当時は「吉展ちゃん事件」で犯人をとり逃すという大失態を演じた警察が、地に落ちた威信を回復するために石川を犯人にデッチあげたのではないかと亀井さんは推定する。石川が無実ならば真犯人は誰なのか。亀井さんは今日も新しい証人を求めて取材にかけまわる。

裁判の公正が問われている今日一つの地方新聞がなし遂げようとしていることは決して小さくはない。